

洞熊学校を卒業した三人

宮沢賢治

青空文庫

※

赤い手の長い蜘蛛くもと、銀いろのなめくぢと、顔を洗ったことのない狸たぬきが、いつしよに洞ほ熊らくま学校にはひりました。洞熊先生の教へることは三つでした。

一年生のときは、うさぎと亀かめのかけくらのことで、も一つは大きいものがいちばん立派だといふことでした。それから三人はみんな一番にならうと一生けん命競争しました。一年生のときは、なめくぢと狸がしじゅう遅刻して罰を食ったために蜘蛛が一番になった。なめくぢと狸とは泣いて口惜くやしがった。二年生のときは、洞熊先生が点数の勘定を間違つたために、なめくぢが一番になり蜘蛛と狸とは歯ぎしりしてくやしがつた。三年生の試験のときは、あんまりあたりが明るいために洞熊先生が涙をこぼして眼めをつぶってばかりゐたものですから、狸は本を見て書きました。そして狸が一番になりました。そこで赤い手長の蜘蛛と、銀いろのなめくぢと、それから顔を洗ったことのない狸が、一しよに洞熊学校を卒業しました。三人は上べは大へん仲よさうに、洞熊先生を呼んで謝恩会といふことをしたりこんどはじぶんらの離別会といふことをやったりしましたけれども、お互にみな

腹のなかでは、へん、あいつらに何ができるもんか、これから誰がいちばん大きくえらくなるか見てみると、そのことばかり考へてをりました。さて会も済んで三人はめいめいじぶんのうちに帰つていよいよ習つたことをじぶんでほんたうにやることになりました。洞熊先生の方もこんどはどぶ鼠をつかまへて学校に入れようと毎日追ひかけて居りました。

ちやうどそのときはかたくりの花の咲くころで、たくさんのたくさんの眼の碧い蜂の仲間が、日光のなかをぶんぶんぶんぶん飛び交ひながら、一つ一つの小さな桃いろの花に挨拶して蜜や香料を貰つたり、そのお札に黄金いろをした円い花粉をほかの花のところへ運んでやつたり、あるいは新らしい木の芽からいらなくなった蠟を集めて六角形の巣を築いたりもういそがしくにぎやかな春の入口になってゐました。

一、蜘蛛はどうしたか。

蜘蛛は会の済んだ晩方じぶんのうちの森の入口の櫓の木に帰つて来ました。

ところが蜘蛛はもう洞熊学校でお金をみんなつかつてゐましたからもうなにひとつもつてゐませんでした。そこでひもじいのを我慢して、ぼんやりしたお月様の光で網をかけは

じめた。

あんまりひもじくてからだの中にはもう糸もない位であった。けれども蜘蛛は

「いまに見ろ、いまに見ろ」と云いひながら、一生けん命糸をたぐり出して、やつと小さな二銭銅貨位の網をかけた。そして枝のかけにかくれてひとばん眼をひからして網をのぞいてみた。

夜あけごろ、遠くから小さなこどものあぶがくうんとうなつてやつて来て網につきあつた。けれどもあんまりひもじいときかけた網なので、糸に少しもねばりがなくて、子どもあぶはすぐ糸を切つて飛んで行かうとした。

蜘蛛くもはまるできちがひのやうに、枝のかけから駆け出してむんずとあぶに食ひついた。

あぶの子どもは「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。」と哀れな声で泣いたけれども、蜘蛛は物も云はずに頭から羽からあしまで、みんな食ってしまった。そしてほつと息をついてしばらくそらを向いて腹をこすつてから、又少し糸をはいた。そして網が一まはり大きくなつた。

蜘蛛はまた枝のかけに戻つて、六つの眼をギラギラ光らせながらじつと網をみつめて居た。

「ここはどこでござりまするな。」と云ひながらめくらのかげろふが杖をついてやつて来た。

「ここは宿屋ですよ。」と蜘蛛が六つの眼を別々にパチパチさせて云った。

かげろふはやれやれといふやうに、巢へ腰をかけました。蜘蛛は走って出ました。そして

「さあ、お茶をおあがりなさい。」と云ひながらいきなりかげろふの胴中に噛みつきました。

かげろふはお茶をとらうとして出した手を空にあげて、バタバタもがきながら、

「あはれやむすめ、父親が、

旅で果てたと聞いたなら」と哀れな声で歌ひ出しました。

「えい。やかましい。じたばたするな。」と蜘蛛が云ひました。するとかげろふは手を合せて

「お慈悲でございます。遺言のあひだ、ほんのしばらくお待ちなされて下されませ。」とねがひました。

蜘蛛もすこし哀れになって

「よし早くやれ。」といってかげろふの足をつかんで待つてゐました。かげろふはほんたうにあはれな細い声ではじめから歌ひ直しました。

「あはれやむすめちゝおやが、

旅ではたと聞いたなら、

ちさいあの手に白手甲、

いとし巡じゆんれの雨とかぜ。

まうしご冥みやうが加かご報謝と、

かどなみなみに立つとても、

非道の蜘蛛の網ざしき、

さはるまいぞや。よるまいぞ。」

「小しやくなことを。」と蜘蛛はたゞ一息に、かげろふを食ひ殺してしまひました。そしてしばらくそらを向いて、腹をこすつてからちよつと眼をぱちぱちさせて

「小しやくなことを言ふまいぞ。」とふざけたやうに歌ひながら又糸をはきました。

網は三まはり大きくなつて、もう立派なかうもりがさのやうな巣だ。蜘蛛はすっかり安心して、又葉のかげにかくれました。その時下の方でいゝ声で歌ふのをききました。

「赤いてながのくうも、

天のちかくをはひまはり、

スルスル光のいとをはき、

きいらりきいらり巢をかける。」

見るとそれはきれいな女の蜘蛛くもでした。

「こゝへおいで」と手長の蜘蛛が云つて糸を一本すうつときげてやりました。

女の蜘蛛がすぐそれにつかまつてのぼつて来ました。そして二人は夫婦になりました。

網には毎日沢山食べるものがかゝりましたのでおかみさんの蜘蛛は、それを沢山たべてみんな子供にしてしまひました。そこで子供が沢山生まれました。所がその子供らはあんまり小さくてまるですきとほる位です。

子供らは網の上ですべったり、相撲すまふをとったり、ぶらんこをやったり、それはそれにはぎやかです。おまけにある日とんぼが来て今度蜘蛛を虫けら会の副会長にするといふみんなの決議をつたへました。

ある日夫婦のくもは、葉のかけにかくれてお茶をのんでゐますと、下の方でへらへらした声で歌ふものがあります。

「ああかい手ながのくうも、

できたむすこは二百疋^{ひき}、

めくそ、はんかけ、蚊のなみだ、

大きいところで稗^{ひえ}のつぶ。」

見るとそれはいつのまにかずつと大きくなったあの銀色のなめくぢでした。

蜘蛛のおかみさんはくやしがつて、まるで火がついたやうに泣きました。

けれども手長の蜘蛛は云ひました。

「ふん、あいつはちかごろ、おれをねたんてるんだ。やい、なめくぢ。おれは今度は虫け

ら会の副会長になるんだぞ。へっ。くやしいか。へっ。てまへなんかいくらからだばかり

ふとつても、こんなことはできまい。へっへっ。」

なめくぢはあんまりくやくして、しばらく熱病になって、

「うう、くもめ、よくもぶじよくしたな。うう。くもめ。」といつてゐました。

網は時々風にやぶれたりごろつきのかぶとむしにこはされたりしましたけれどもくもは
すぐすうすう糸をはいて修繕^{あり}しました。

二百疋の子供は百九十八疋まで蟻^{あり}に連れて行かれたり、行衛^{ゆくゑ}不明になったり、赤痢にか

かつたりして死んでしまひました。

けれども子供らは、どれもあんまりお互ひに似てゐましたので、親ぐもはすぐ忘れてしまひました。

そして今はもう網はすばらしいものです。虫がどんどんひつかゝります。

ある日夫婦の蜘蛛くもは、葉のかげにかくれてまた茶をのんでゐますと、一疋の旅の蚊がこつちへ飛んで来て、それから網を見てあわてて飛び戻つて行つた。くもは三あしばかりそつちへ出て行つてあきれたやうにそつちを見送つた。

すると下の方で大きな笑ひ声をしてそれから太い声で歌ふのが聞えました。

「ああかいてながのくうも、

てながの赤いくも

あんまり網がまづいので、

八千二百里旅の蚊も、

くうんとうなつてまはれ右。」

見るとそれは顔を洗つたことのない狸たぬきでした。蜘蛛はキリキリキリツとはがみをして云ひました。

「何を。狸め。おれはいまに虫けら会の会長になってきつときさまにおじぎをさせて見せるぞ。」

それからは蜘蛛は、もう一生存けん命であちこちに十も網をかけたなり、夜も見はりをしたりしました。ところが諸君困ったことには腐敗したのだ。食物があんまりたまつて、腐敗したのです。そして蜘蛛の夫婦と子供にそれがうつりました。そこで四人は足のさきからだんだん腐れてべとべとになり、ある日たうとう雨に流れてしまひました。

ちやうどそのときはつめくさの花のさくころで、あの眼の碧い蜂の群は野原ぢゆうをもうあちこちにちらばつて一つ一つの小さなぼんぼりのやうな花から火でももらふやうにして蜜を集めて居りました。

二、銀色のなめくぢはどうしたか。

丁度蜘蛛が林の入口の櫓の木に、二銭銅貨の位の網をかけた頃、銀色のなめくぢの立派なうちへかたつむりがやつて参りました。

その頃なめくぢは学校も出たし人がよくて親切だといふもう林中の評判だった。かたつ

むりは

「なめくぢさん。今度は私もわたしすっかり困ってしまひましたよ。まだわたしの食べるものはなし、水はなし、すこしばかりお前さんのうちにためてあるふきのつゆを呉くれませんか。」と云ひました。

するとなめくぢが云ひました。

「あげますともあげますとも、さあ、おあがりなさい。」

「あゝありがたうございます。助かります。」と云ひながらかたつむりはふきのつゆをどくどくのみました。

「もつとおあがりなさい。あなたと私わたくしとは云はば兄弟。ハツハハ。さあ、さあ、もう少しおあがりなさい。」となめくぢが云ひました。

「そんならもう少しいたゞきます。あゝありがたうございます。」と云ひながらかたつむりはもう少しのみました。

「かたつむりさん。気分がよくなつたら一つひさしぶりで相撲すまふをとりませうか。ハツハハ。久しぶりです。」となめくぢが云ひました。

「おなかがついて力がありません。」とかたつむりが云ひました。

「そんならたべ物をあげませう。さあ、おあがりなさい。」となめくちはあぎみの芽やな
んか出しました。

「ありがたうございます。それではいたゞきます。」といひながらかたつむりはそれを喰
べました。

「さあ、すまふをとりませう。ハツハハ。」となめくちがもう立ちあがりました。かたつ
むりも仕方なく、

「わたし私はどうも弱いのですから強く投げないで下さい。」と云ひながら立ちあがりました。

「よっしょ。そら。ハツハハ。」かたつむりはひどく投げつけられました。

「もう一ぺんやりませう。ハツハハ」

「もうつかれてだめです。」

「まあもう一ぺんやりませうよ。ハツハハ。よっしょ。そら。ハツハハ。」かたつむりは
ひどく投げつけられました。

「もう一ぺんやりませう。ハツハハ。」

「もうだめです。」

「まあもう一ぺんやりませうよ。ハツハハ。よっしょ、そら。ハツハハ。」かたつむりは

ひどく投げつけられました。

「もう一ぺんやりませう。ハツハハ。」

「もうだめ。」

「まあもう一ぺんやりませうよ。ハツハハ。よつしよ。そら。ハツハハ。」かたつむりはひどく投げつけられました。

「もう一ぺんやりませう。ハツハハ。」

「もう死にます。さよなら。」

「まあもう一ぺんやりませうよ。ハツハハ。さあ。お立ちなさい。起こしてあげませう。よつしよ。そら。ハツハツへ。」かたつむりは死んでしまひました。そこで銀色のなめくぢはかたつむりを殻ごとみしみし喰べてしまひました。

それから一ヶ月ばかりたって、とかげがなめくぢの立派なおうちへびっこをひいて来ました。そして

「なめくぢさん。今日は。お薬をすこし呉れませんか。」と云ひました。

「どうしたのです。」となめくぢは笑って聞きました。

「へびに嘔かまれたのです。」ととかげが云ひました。

「そんならわけはありません。私わたしが一寸ちよつとそこを嘗なめてあげませう。わたしが嘗めれば蛇へびの毒はすぐ消えます。なにせ蛇さへ溶けるくらゐですからな。ハツハハ。」となめくぢは笑つて云ひました。

「どうかお願い申します」ととかげは足を出しました。

「えゝ。よござんすとも。私わたしとあなたとは云はば兄弟。あなたと蛇も兄弟ですね。ハツハハ。」となめくぢは云ひました。

そしてなめくぢはとかげの傷に口をあてました。

「ありがとう。なめくぢさん。」とかげは云ひました。

「も少しよく嘗めないとあとで大変ですよ。今度又来てももう直してあげませんよ。ハツハハ。」となめくぢはもがもが返事をしながらやはりとかげを嘗めつゞけました。

「なめくぢさん。何だか足が溶けたやうですよ。」とかげはおどろいて云ひました。

「ハツハハ。なあに。それほどぢやありません。ハツハハ。」となめくぢはやはりもがもが答へました。

「なめくぢさん。おなかは何だか熱くなりましたよ。」とかげは心配して云ひました。

「ハツハハ。なあにそれほどぢやありません。ハツハハ。」となめくぢはやはりもがもが

答へました。

「なめくぢさん。からだが半分とけたやうですよ。もうよして下さい。」ととかげは泣き声を出しました。

「ハツハハ。なあにそれほどぢやありません。ほんのも少しです。ハツハハ。」となめくぢが云ひました。

それを聞いたとき、とかげはやつと安心しました。安心したわけはそのとき丁度心臓がとけたのです。

そこでなめくぢはペロリととかげをたべました。そして途方もなく大きくなりました。あんまり大きくなつたので嬉うれしまぎれについあの蜘蛛くもをからかつたのでした。

そしてかへつて蜘蛛からあざけられて、熱病を起して、毎日毎日、ようし、おれも大きくなるくらゐ大きくなつたらこんどはきつと虫けら院の名誉議員になつてくもが何か云つたときふうと息だけついて返事してやらうと云つてゐた。ところがこのころからなめくぢの評判はどうもよくなりませんでした。

なめくぢはいつでもハツハハと笑つて、そしてヘラヘラした声で物を言ふけれども、どうも心がよくなって蜘蛛くもやなんかよりは却かへつて悪いやつだといふのでみんなが軽べつをは

じめました。殊たぬきに狸はなめくぢの話が出るといつでもヘンと笑って云ひました。

「なめくぢのやりくちなんてまづいもんさ。ぶま加減は見られたもんぢやない。あんなやりかたで大きくなつてもしれたもんだ。」

なめくぢはこれを聞いていよいよ怒つて早く名譽議員にならうとあせつてゐた。そのうちに蜘蛛が腐敗して溶けて雨に流れてしまひましたので、なめくぢも少しせいせいしながら誰たれか早く来るといゝと思つてせっかく待つてゐた。

するとある日 雨あまがへる 蛙かがやつて参りました。

そして、

「なめくぢさん。こんにちは。少し水を吞のませませんか。」と云ひました。

なめくぢはこの雨蛙もペロリとやりたかつたので、思ひ切つていゝ声で申しました。

「蛙さん。これはいらつしやい。水なんかいくらでもあげますよ。ちかごろはひでりですけれどもなあに云はばあなたと私わたくしは兄弟。ハツハハ。」そして水がめの所へ連れて行きました。

蛙はどくどくどくどく水を呑んでからとぼけたやうな顔をしてしばらくなめくぢを見てから云ひました。

「なめくぢさん。ひとつすまふをとりませうか。」

なめくぢはうまいと、よろこびました。自分が云はうと思つてゐたのを蛙の方が云つたのです。こんな弱つたやつならば五へん投げつければ大ていペロリとやれる。

「とりませう。よつしよ。そら。ハツハハ。」かへるはひどく投げつけられました。

「もう一ぺんやりませう。ハツハハ。よつしよ。そら。ハツハハ。」かへるは又投げつけられました。するとかへるは大へんあわててふところから塩のふくろを出して云ひました。

「土俵へ塩をまかなくちやだめだ。そら。シユウ。」塩が白くそこらへちらばつた。

なめくぢが云ひました。

「かへるさん。こんどはきつと私わたくしなんかまけますね。あなたは強いんだもの。ハツハハ。

よつしよ。そら。ハツハハ。」蛙はひどく投げつけられました。

そして手足をひろげて青じろい腹を空に向けて死んだやうになつてしまひました。銀色のなめくぢは、すぐペロリとやらうと、そつちへ進みましたがどうしたのか足がうごきません。見るともう足が半分とけてゐます。

「あ、やられた。塩だ。畜生。」となめくぢが云ひました。

蛙はそれを聞くと、むっくり起きあがつてあぐらをかいて、かばんのやうな大きな口を

一ぱいにかけて笑ひました。そしてなめくぢにおじぎをして云ひました。

「いや、さよなら。なめくぢさん。とんだことになりましたね。」

なめくぢが泣きさうになつて、

「蛙さん。さよ……。。」と云つたときもう舌がとけました。雨蛙はひどく笑ひながら

「さよならと云ひたかつたのでせう。本当にさよならさよなら。わたしもうちへ歸つてからたくさん泣いてあげますから。」と云ひながら一目散に歸つて行つた。

さうさうこのときは丁度秋に蒔いた蕎麦の花がいちめん白く咲き出したときであの眼の碧いすがるの群はその四つ角な畑いっばいうすあかい幹の間をくぐつたり花のついたちひさな枝をぶらんこのやうにゆすぶつたりしながら今年の終りの蜜をせつせと集めて居りました。

三、顔を洗はない狸。

狸はわざと顔を洗はなかつたのだ。丁度蜘蛛が林の入口の櫓の木に、二錢銅貨位の巢をかけた時、じぶんのうちのお寺へ歸つてゐたけれども、やっぱりすつかりお腹が空いて一

本の松の木によりかかって目をつぶつてゐました。すると兎がやうて参りました。

「狸さま。かうひもじくては全く仕方ございません。もう死ぬだけでございます。」

狸がきもののえりを搔き合せて云ひました。

「さうぢや。みんな往生ぢや。山猫大明神さまのおぼしめしどほりぢや。な。なまねこ。なまねこ。」

兎も一緒に念猫をとなへはじめました。

「なまねこ、なまねこ、なまねこ、なまねこ。」

狸は兎の手をとつてもつと自分の方へ引きよせました。

「なまねこ、なまねこ、みんな山猫さまのおぼしめしどほりになるのぢや。なまねこ。なまねこ。」と云ひながら兎の耳をかじりました。兎はびつくりして叫びました。

「あ痛つ。狸さん。ひどいぢやありませんか。」

狸はむにやむにや兎の耳をかみながら、

「なまねこ、なまねこ、世の中のこととはな、みんな山猫さまのおぼしめしのとほりぢや。おまへの耳があんまり大きいのでそれをわしに噛つて直せといふのは何といふありがたいことぢや。なまねこ。」と云ひながら、たうとう兎の両方の耳をたべてしまひました。

兎もさうきいてゐると、たいへんうれしくてボロボロ涙をこぼして云ひました。

「なまねこ、なまねこ。あゝありがたい、山猫さま。私のやうなつまらないものを耳のこ
とまでご心配くださいますとはありがたいことでございます。助かりますなら耳の二つや
そこらなんでもございませぬ。なまねこ。」

狸もたぬきそら涙をボロボロこぼして

「なまねこ、なまねこ、こんどは兎の脚をかじれとはあんまりはねるためでございますう
か。はいはい、かじりますかじりますなまねこなまねこ。」と云ひながら兎のあとあしを
むにやむにや食べました。

兎はますますよろこんで、

「あゝありがたや、山猫さま。おかげでわたくしは脚がなくなってもう歩かなくてもよ
くなりました。あゝありがたいなまねこなまねこ。」

狸はもうなみだで身体もふやけさうに泣いたふりをしました。

「なまねこ、なまねこ。みんなおぼしめしのとほりでございます。わたしのやうなあさま
しいものでも、命をつないでお役にたてと仰られますか。はい、はい、これも仕方はござ
いませぬ、なまねこなまねこ。おぼしめしのとほりにいたします。むにやむにや。」

兎はすっかりなくなつてしまひました。

そして狸のおなかの中で云ひました。

「すっかりだまされた。お前の腹の中はまつくろだ。あゝくやしい。」

狸は怒つて云ひました。

「やかましい。はやく溶けてしまへ。」

兎はまた叫びました。

「みんな狸にだまされるなよ。」

狸は眼をぎろぎろして外へ聞えないやうにしばらくの間口をしつかり閉ぢてそれから手で鼻をふさいでゐました。

それから丁度二ヶ月たちました。ある日、狸は自分の家うちで、例のとほりありがたいごきおほかみもみたうをしてゐますと、狼が糶おほかみもみを三升さげて来て、どうかお説教をねがひますと云ひました。

そこで狸は云ひました。

「お前はものの命をとつたことは、五百や千では利くまいな。生きとし生けるものならばなにとて死にたいものがあらう。な。それをおまへは食つたのぢや。な。早くぎんげさつしやれ。でないとあとでえらい責苦にあふことぢやぞよ。おゝ恐ろしや。なまねこ。なま

ねこ。」

狼はすっかりおびえあがつて、しばらくきよろきよろしながらたづねました。

「そんならどうしたらいゝでせう。」

狸が云ひました。

「わしは山ねこさまのお身代りぢやで、わしの云ふとほりさっしやれ。なまねこ。なまねこ。」

「どうしたらようございませう。」と狼があわててききました。狸が云ひました。

「それはな。じつとしてゐさしやれ。な。わしはお前のきばをぬくぢや。このきばでいかほどのものをとつたか。恐ろしいことぢや。な。お前の目をつぶすぢや。な。この目で何ほどのものをにらみ殺したか、恐ろしいことぢや。それから。なまねこ、なまねこ、なまねこ。お前のみゝを一寸ちよつとかじるぢや。これは罰ぢや。なまねこ。なまねこ。こらへなされ。お前のあたまをかじるぢや。むにや、むにや。なまねこ。この世の中は堪忍が大事ぢや。なま……。むにやむにや。お前のあしをたべるぢや。なかなかうまい。なまねこ。むにや。むにや。おまへのせなかを食ふぢや。ここもうまい。むにやむにやむにや。」

たうとう狼はおほかみみんな食はれてしまひました。

そして狸のはらの中で云ひました。

「こゝはまつくらだ。あゝ、こゝに兎の骨がある。誰が殺したらう。殺したやつはあとで狸に説教されながらかじられるだらうぜ。」

狸はやかましいやかましい蓋をしてやらう。と云ひながら狼の持つて来た糶を三升風呂敷のまゝ呑みました。

ところが狸は次の日からどうもからだの工合がわるくなつた。どういふわけか非常に腹が痛くて、のどのところへちくちく刺さるものがある。

はじめは水を呑んだりしてごまかしてゐたけれども一日一日それが烈しくなつてきてもう居ても立つてもゐられなくなつた。たうとう狼をたべてから二十五日めに狸はからだがゴム風船のやうにふくらんでそれからボローンと鳴つて裂けてしまつた。

林中のけだものはびっくりして集つて来た。見ると狸のからだの中は稲の葉でいっぱいでした。あの狼の下げて来た糶が芽を出してだんだん大きくなつたのだ。

洞熊先生も少し遅れて来て見ました。そしてあゝ三人とも賢いゝこどもらだつたのにじつに残念なことをしたと云ひながら大きなあくびをしました。

このときはもう冬のはじまりであの眼の碧い蜂の群はもうみんなめいめいの蟬でこさへ

た六角形の巢にはひつて次の春の夢を見ながらしづかに睡ねむって居りました。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十一卷」筑摩書房

1979（昭和54）年11月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年12月20日初版第5刷発行

※底本は旧仮名ですが、拗促音は小書きされています。これにならない、ルビの拗促音も、小書きにしました。

入力：林 幸雄

校正：土屋隆

2008年2月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

洞熊学校を卒業した三人

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>